

山と博物館

第9巻 第12号

1964年12月25日

大町山岳博物館



冬山とトランシーバー

昨年の越年登山では雪が少なく、ラッセルよりヤブコギに悩まされたが、今年はどうやらヤブも雪の下にかくれそうである。

冬山も年々入山者がふえ、昨年の爺方岳東尾根越年組は女性パーティーも含めて実に10数パーティー。そして、それらのパーティーが通信連絡用に持ちこんだトランシーバーの数も相当なものであった。種々のメーカーのものでサイクルも違っているのが、時間がガツチ合ったり、割り込まれたりして混線につぐ混線で、とても一度や二度では連絡がつかない。トランシーバーに怒るようにして連絡をとっていた無線係も最後には頭にきてしまった。

明るくなるから暗くなるまで、何時スイッチを入れてもどこかのパーティーが必ず通信しているのである。又一台でも出力の大きな無線機に割り込まれると完全にお手上げである。その上、ひどいになるとB・CからC・Iに今晚の献立はと、こと細かに連絡をとっているのがある。冬山に食糧計画ができたのではないかと疑いたくもなる。

「トランシーバー」は「便利なようでは不便なもの」これがこの冬山でのトランシーバー評価であった。各パーティーが簡単、明瞭、かつ短時間に通信連絡を行ない、トランシーバーの偉力を充分使いきなせるようにして、今年の冬山を楽しくしたいものである。

(千葉彬司)

冬のモズ

「ハヤニエについて」

長沢修介

十二月の森林は淋しい。ほとんどの小鳥達は南の暖い地方に去ってしまい、ほんのわずかな冬鳥しか残っていない。木々もすっかり葉を落して最後迄と思っていた一枚の葉も冷たい北風にあえなく散って、寒々とした丸坊主の木々に訪れる小鳥達の姿もない。

わずかに日溜りの叢や、ススキの藪にカシラダカやホオジロの少群がほんのいることがわずかに知れる程度の小さな声でチツ、チツと鳴いて食べ残された草の実や、こぼれ落ちた木の実を啄んでいる。

松林や杉の林の中には、これも又体を丸くしたカラ類の群が小さな虫の音の様な声でお互を確かめあって、枝から枝へと虫を求めて探し廻っているが、来るべき冬將軍への準備に急しく、何か追われるような淋しささへ感じさせる。

そんな林の中で唯一人、毎年一人で冬を過ごすモズがいる。せわしく動き廻るのでもなく林の端などの枝に止ってあの長い尾を、一種独特な旋廻的な廻し方で振っては空の彼方を見つめている。又、時としては附近の田圃の椿抗などに止ってじっと獲物を狙っている姿は鷹のそれを思わせる。

一体この辺りで冬を越すモズは少なく、夏の繁殖期になると夏鳥であるアカモズも合せて半程二〇位の円の中には、必ず一個の巣が見つかるのに冬になるとほとんどが南に去り、一Km歩いても見当らないことが多い。モズは他の小鳥達と異って生餌であること

がその主な原因であって、冬になると夏よりも縄張が一層きびしくなる。

まず稲穂が黄ばみ始める九月初旬頃から冬の縄張り争いが始まる。

この頃になると、高い見晴しの良い木の梢に止って四方をにらみながらキィー、キィーと勇ましく鳴く。これを「モズの高鳴き」といつて昔から詩にも詠れて有名であるが、実はこれはモズにとつては大切な冬の欠乏期を乗り切るために自分の縄張りを確保するための大切な行動である。だから、あらん限りの声を出して自己を宣言し、より広く、より良い土地を得るために早朝から夕暮迄、声をかちかち鳴き続けるのである。

この頃、良く注意してみていると縄張り争いの烈しい戦いが見られる。まずこちらの木でキィーキィーとやると、少し離れた向うの木でキィー、キィーと大声で答える。やがてその距離が少しづつせばめられ、ついに一本の木で両者が相向いもつれるように木から落ち敗者は去り、勝者は勝ち得た喜びと新たな敵への宣言のため、尚大声をはりあげ胸を張って、キィーキィーキィーと鳴くのである。詩にも詠まれ、歌にもなる秋の美しい風景が実は自然界の中では、生るための流血の戦いである。

「モズの高鳴き75日」と昔から言われているように10月も中旬を過ぎるともうほとんど縄張りも決り紅葉も散り始める頃となる。この頃になるとモズは一種独特の習性を見

せてくれる。

それは自分の領域内の枯枝やとげのある小枝にいろいろの生餌を刺しておいておく習性でこれを「早饗」と言いモズだけが行う興味ある習性である。

この「ハヤニエ」の犠牲者になる動物は、ネズミ、コウモリ、の少哺乳類から、スズメコウラヒワ等の小鳥、トカゲ、カナヘビの爬虫類、トノサマガエル、アマガエル、アオガエル、イモリ等の両棲類ドジョウ、フナ、ハヤ等の魚類、バッタ、イナゴ、カマキリ、クツワムシ、ケラ、コウロギ、ゲンゴロウ、セミ、蝶蛾、アシナガバチ、スズメバチ等の昆虫類、ミミズの環形動物に至る迄沢山のものが報告されているが私の見た甲ではアマガエル、イナゴ、バッタ等が一番多い様である

又これに使う木は

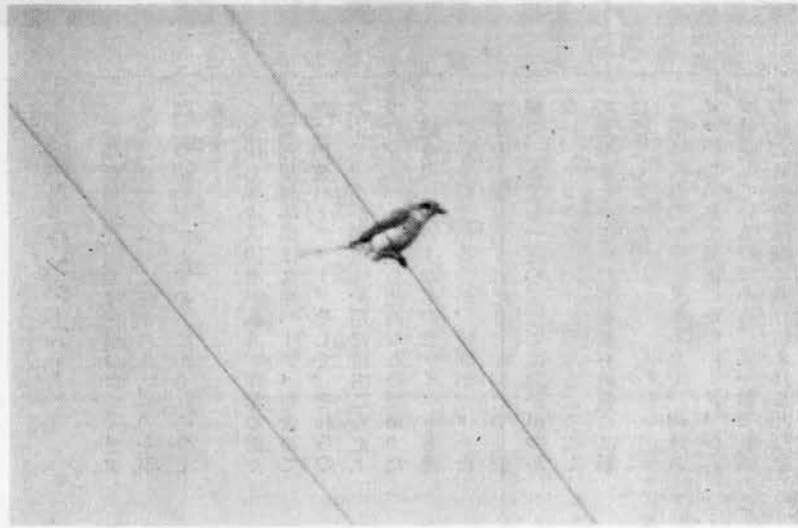
- ニシキウツギ、タニウツギ、ガマウツギ、ノイバラ、ナナカマド、モモ、ナシ、スモモ、ウメ、ズミ、サクラ、ツバキ、クロウメモドキ、ナツメ、ヌルデ、ナンテン、エノキ、ケヤキ、クワ、イチジク、シイ、クスギ、クリ、ナラ、フジ、ミカン、ダイダイ、カラタチ、サンショウ、ザクロ、グミ、アカマツ、スギ、竹ボアラ

等大体かつ葉樹の横枝を利用し又バラのトゲなどにも刺し貫いているこのハヤニエを作る所を私も一回だけ目撃したことがある。

それはもう五、六年も前の十一月の初めの或る朝のこと、昨夜の冷え込みがきびしく雨の降った次の朝の様にしつとりと露が降りている朝で

あった。昨夜張ったであろうクモの巣に、その細い粒がついて、それに朝日が当り真珠の様にくモの巣が光り輝いていて、何とも形容のない美しさであった。そのクモの糸のあまりの美しさについてみると、朝の寝ざめのほんやりした顔を冷していると、柿の木にモズが来て止った。良くみると嘴にアカガエルをくわえている。モズはしばらくあちこち見廻しが、やがて昨年小柿を取獲のため折った小枝でいたの折れ口の所に行き、口にくわえたカエルをその折れ先にこすりつけるように何度か何度もカエルの足をくわえては引張って

電線にとまるモズ





カエルのハヤニエ

いた。始めは何をするのか解らず、木に打ちつけてカエルを殺しているのかと思つたがそんなにも長くやらすともモツのあるするどい嘴で力いっぱい咬まれたらアカガエルなど一たまりもないと思うになど考え、では食べるのに小枝に刺して引きさいて食べるのかなど考えてみたが、それにはあんな苦勞して枝に刺さすとも両足の爪でおさえ、するどい嘴で引きさきぎって食べられるはずだなど、モツの動作を見ながらあれこれ思つているうちに、カエルは枝の折れ先に胴体を刺され、手足をダラリと下げてしまった。それでモツはやつと

一仕事終つたという風に小枝に嘴をすりつけて化粧し、すーと又何処かへ飛び去つた。私は食べるとはかり思つていたので、全々食べず、ただ刺したのみで飛び去つたのが不思議でならなかつた。

モツが飛び去つたのは今迄餌のことで夢中になつていて、私の見ているのも知らなかつたせいかも知れず、一仕事終え、さて食べようと思つて私の見ているのに気付き、あわてて逃げたのかも知れず、この仕事が必要もしもハヤニエを作る動作とは断定は出来ないにしても、何故小枝に刺したろうという疑いは残る。それなら、しばらくしたら食べ

野外で見かけるハヤニエは半分食べかけのものもあり前者の食べる時に枝に刺して引きさきぎって食べていたが、何かの障害が起き、急に飛び立ちそのまま忘れてしまい、乾燥して出来たものだとすることも考えられないこともない。

モツが貯蔵のためにハヤニエを作り、その場所を一つ一つ記憶しており、積雪などで急に餌がなくなつた時にそれを食べて餌をしのぐというそこまで人間が行うような計画的のある動物であるうか。あの小さな鳥が、たとえそれが本能であるにしろもしそれが本当であるなら正に驚異である。

ともあれ十一月初旬から十二月初頃迄は氣をつけて探せばハヤニエは良く見かけることが出来るが十二月も中旬を過ぎ積雪が多くなると見かける機会が少ない。

それは記憶して食べて来るのか、他の餌を探して飛来した木にあったものを食べるのか不明だが、翌年の春の前迄にはそのほとんどがなくなつてしまふ。

モツは肉食であるため同じ小鳥達も良く襲う。籠に入れて飼育していたマヒワやカナリヤを襲うこともしばしばはで籠の目から飼育鳥の首だけ引きぬいて飛び去つてしまつたという被害を蒙つたこともあるし、そんな話を良く聞く。又野外で小鳥を捕食することもある事実私が目撃した例で一月の雪の降る日、一群の雀が家の軒に餌を拾っている所へパツとモツが襲いかかり、あわてた雀達は一っせいに逃げたのだがその中の一羽が先程の攻撃で翼を傷つけたらしくびっこを引いて飛び逃るのに、すかさず第二の攻撃を加え、雀はひとたまりもなく地上に落ちてしまつた。モツはすかさず雀の上に飛びかかり、目玉をくりぬき、脳漿をむさぼり食べてしまつた。それ

に来るだろうと、それとなく氣をつけて見ていたが、ついにその日はそのまゝ、次の日も食べに来た様子はなかつた。一週間は過ぎ二週間過ぎ十一月の下旬になって急になくなつてしまつた。風にでも吹かれて下に落ちたかと思つて探してみたが落ちてはいす、何処かに運び去られたのか、モツが来て食べたのかついに解らずじまいになつてしまつた。

一体モツは、何故ハヤニエを作るかという疑問は、生餌を食べ良いように木の枝等に刺して引きさきぎって食べるため、その残りだという説と冬の欠乏期にそなえて木の枝等に刺しておいて乾燥させ、いよいよ生餌が欠乏して来た時に食べるのだという貯蔵説の二つがあるが、どちらも確たるものがないようだ。

しかしモツがハヤニエを食べることは事実らしく、又それを食べる率は積雪に大きな関係があることは立証されている。

はほんの瞬間の出来事で、あわてて私がかけてみた時は、雀は無残な死骸となつていた。この時程自然界の法則を嫌という程みせつけられたことはない。

又この鳥は、他の鳥の声を真似るのが功妙で、小春日和の日など高い木の梢などで、小声でウグイスのホーホケキョキョキョやコカワラヒワのコロコロ、ギリギリ等の真似をやっている。時にもっと複雑なヒバリともカシラダカの嘔りともつかぬ複雑な嘔りだか一人言だかもやっている。

この他の鳥の声を真似るのは、それを聞いてその鳥が集つた時に襲うのだという説もあるがこれはどうも真実性が乏しい。

(山博調査員)

スケッチ

37年皇居外苑保存協会から大町に興入られたコブハクチョウは今年の五月三羽がかえり、今では親と見分けがつかない位に成長した。

繁殖期が近づいて来たのでこのたび別の池に三羽を移し、繁殖に万全を期した

果鳥獣にライチョウ、カモシカか？

長野県では今まで、果鳥、果獣の指定がなされていなかったもので、このたび果鳥獣を指定しようという動きが高まってきた。

果としてはライチョウ、チョウゲンボウ、ホシガラス、カモシカ、リスの5鳥獣の候補を上げて、その中から選ぶ事になっているが、最終的にはライチョウ、カモシカが指定されるむきが強くなつてきた。

カモシカ

キリスト教の信仰をさしとめる政策は、古く戦国時代の末に秀吉によってうち出されてはいたが、関西から九州にかけては、この政策に逆行して年をおってその信仰は盛んになっていった。秀吉のあと全国統一の座についた家康も、封建国家実現のためにはキリスト教信仰を禁制する必要を感じ、秀吉同様の政策をとったが、寛永一四年(一六三七年)三代将軍家光の代に、この政策に反旗をひるがえして九州島原でキリスト教徒の反乱がおこるなど、幕府にとっては憂慮すべき事態にたちいたった。そこで幕府は、寛永一七年キリスト教を厳禁し、キリスト教徒を摘発するための手段として幕府直轄の領内に対し、武士庶民を問わず、かならずいづれかの仏寺に属すべきであるとの従来の政策を強固にし、毎年きまった時期にその家の属する旦那寺からそれぞれの仏寺の宗旨に入っていることの証明をうけるようにさせたが、これを宗門改めとよんでいる。

松本藩の宗門改め (二)

巾 具 義

とを命じた。松本藩のこれに関する史料としては、藩主水野氏が編纂した「信府統記」の中に「(上略)古ヨリ改アリトイヘドモ、寛文中ヨリ殊サラ悉ク正セルニヤ、年々ノ帳面残ラズ庫中ニ納メ置ケリ(下略)」とありまた寛文四年六月に「吉利支丹宗門毎年御法度の通り、常々不思議なる者、生所知れざる者堅く相改め、もし怪しき者これ有らば、早々注進申し上ぐべき事」との法度が水野家四老連名のもとに出されている。それで同年のうち出された幕令を裏書きできるのであるが果して松本藩では宗門改めをこの頃から実施したのであるというのは疑わしい。というのは、寛文四年より一四年ほどさかのぼる慶安三年に、村々から松本藩に提出しているつぎの帳簿が存在するからである。

- 1、大町組東小谷土屋村宗自家帳
慶安三年二月八日 (小谷村 太田清輝氏蔵)
- 2、東小谷中屋家帳
慶安三年二月七日 (小谷村 右同氏蔵)
- 3、大町組塩島村(宗自家帳)
慶安三年二月五日 (松本市立博物館蔵)

右の三帳は、いずれも内容が同様の体裁で記述されているが、そのうち塩島村分の本文冒頭の記事を掲げることしよう。(原文のまま)

指上申一札之事
一家帳宗官御改被レ成候、書上申候より外ニハ家々問も、又ハ宗官しれ不レ申候者、吾人も隠不レ申候、若かくし申候と訴人御座候者、何様之曲事ニも可レ被ニ仰付一候、為ニ後日一札仍如レ件、

平林学芸員

「棚橋賞」受賞

博物館界唯一の賞である「棚橋賞」の三十九年度受賞者は、当山岳博物館の平林国男学芸員に決定し、去る十一月二十五日、第十二回全国博物館大会において表彰された。

受賞の対象となった論文は博物館研究、一九六三年四月号に掲載された「大町山岳博物館における、ライチョウ保護増殖研究について」で内容は「大町山岳博物館と自然保護」「ライチョウ保護施設の現状」「ライチョウ調査開始以後」「地方博物館と自然保護」の四項目にわかれ自然保護の種々の問題についてふれている。

棚橋賞が設定されたのは昭和三十七年、博物館をこよなく愛し、日本の博物館のためにその生涯を捧げて尽された人、棚橋原太郎先生を記念して作られたもので、博物館事業の発展に寄与したものに与えられる。選考は近年一年間における「博物館研究」誌上に発表されたもので、博物館学論説、論文(調査研究活動等も含む)から一編を選ぶものである。

博物館 ニューズ

山博協議会開かる

山博協議会は12月12日の午後から、大町商工会議所会議室で開かれて40年度の事業や予算について協議した。

館側から提案されたいくつかの議案について終始熱心に話し合われたが、とくに動物舎の移動新築に議論が集中した。40年度は黒四ダムが本格的に開放される年であり、現状の館の受入態勢では観光客を満足させることができなければかりか、かえって悪い印象を与えてマイナスだと云うのである。

早々動物舎を移転整備してカモシカ、ライチョウ、サルなどの放養をたのしみ、防火貯水池を建設し、イワナ、サンショウウオなど山岳水棲動物を育ててもらえるならば、市民の絶好の憩の場ともなるし、観光客にも嬉んで貰えるという訳である。

予算では総額千二百万円、補正を含めた39年度予算に比し、六百万円の増となっているが、動物舎の建設関係四百万円、屋根修理五十万円、針の木自然園関係二十万などを計上したため、他は諸物価の単価増を見込んだ昨年並み事業予算となっている。

表紙説明

鹿島槍、遠見尾根より

撮影 内田博文

山と博物館 第九巻第十二号

発行所 長野県大町市T.E.L(大町)二二

大町山岳博物館

印刷所 大町市上仲町

信州印刷大町工場

